

---

## 特集：2007年アジア研究学会

---

シンクタンクからアーカイブへ

# 日本研究の研究資源および研究対象としての 大原社会問題研究所

---

## 特集にあたって

本特集は、2007年3月22日～25日にボストンで開催されたアジア研究学会第59回大会のセッションの1つとして23日午後に行われた「シンクタンクからアーカイブへ：日本研究の研究資源および研究対象としての大原社会問題研究所」について、その内容を報告する。アジア研究学会は、人文科学、社会科学分野のアジア研究者を組織するアメリカに本拠をおいた国際学会（会員数約7000人）で、毎年アメリカで大会が開かれている。06年の大会は、合計で228のセッションが開かれた。プログラムの内容はインターネット上でみることができる（< <http://www.aasianst.org/times07.htm> >を参照）。

本セッションは、司会者であるハーバード大学歴史学部のアンドルー・ゴードン教授の企画によるものである。セッションのねらいは、日本研究者を中心としたアジア研究者に大原社研の所蔵資料および研究所WEBサイトのリソースを紹介すること、および所蔵資料を利用した若手歴史研究者からそれぞれの研究内容を発表してもらうことであった。また、大原社研の元所長で名誉研究員である二村一夫氏から、それぞれの発表についてコメントがあった。

セッションが始まる直前、ホテルの火災報知機が鳴り学会参加者全員がいったんホテルの外に避難したため、開始が20分遅れるアクシデントに見舞われたものの（火災は起きていなかった）、関係者以外で30人程度がセッションに参加した。本特集ではプログラムのうち、アンドルー・ゴードン氏の挨拶・企画説明、中山いづみ氏およびクリストファー・ガータイス氏の発表、二村一夫氏のコメントを掲載する。私（鈴木玲）の発表は、WEBサイト概要についてのパワーポイントでの発表だったので、省略した。ゴードン氏、中山氏、ガータイス氏の挨拶および発表は、鈴木が翻訳した。また、ガータイス氏の発表は、翻訳の都合上一部編集した。なお、翻訳にあたり、松尾純子氏よりコメントを得た。

このセッションを通じて感じたことは、大原社会問題研究所が海外の多くの日本研究者に知られていること、とくにインターネットにより発信されたリソースが活用されていることであった。アジア研究学会は、「発信者」と「受信者」が「海を越えて」直接顔を合わせて話すことができる、貴重な体験をする機会を提供した。

（鈴木 玲）